九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宋之問「明河篇」と初唐の公主たち

種村, 由季子
九州大学 : 専門研究員

https://doi.org/10.15017/1906421

出版情報：中国文学論集. 46, pp.1-18, 2017-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

宋之問「明河篇」と初唐の公主たち

種村由季子

宋之問は醜聞の多い詩人である。例えば劉希夷「代悲白頭翁」の一句「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」を気に入り譲るよう要求したが、断られて殺害したという話はよく知られる。[1] また武則天の寵臣張易之に取り入り彼のために尿器を捧げ持って阿ったり、[2] 左遷を命じられた際には、無断で都に戻った挙げ句、匿ってくれた友人張仲之の謀心を知り、甥の宋曇に密告を指示、報賞として鴻臚館主簿の職を得たため「義士の譏る所と為る」など、[3] 彼の伝記や逸話には、とかくその為人について否定的な記述が多い。目加田誠氏が宋之問を評して「まことに詩の上手といふ可き男であつたが、小才子で、その人物の卑劣さは永く君子に軽蔑されるところであるが、ただ終始詩にすがりついた人物であった」[4] と述べるのも、総じてかかる人品劣悪な行状のためである。

さて、代表作である「明河篇」にも、宋之問にとっては屈辱的なエピソードが伝わる。

宋考功、天后朝求爲北門學士、不許、作「明河篇」以見其意。末云、「明河可望不可親、願得乘槎一問津。更將織女支機石、還訪成都賣卜人。」則天見其詩、謂崔融曰、「吾非不知之問有才調、但以其有口過。」蓋以之問患齒疾、口常臭故也。之問終身慚憤。

宋考功、天后朝に北門学士為らんことを求むるも、許されず、「明河篇」を作りて以て其の意を見(あらは)す。末に云ふ、「明河は望むべくも親しむべからず、願はくは槎に乗りて一たび津を問ふを得ん。更に織女の支機石を将て、還た成都の売卜人を訪はん」と。則天其の詩を見、崔融に謂ひて曰はく、「吾は之問の才調有るを知らざ

るに非ず、但だ其の口過有るを以てするのみ」と。蓋し之問の歯疾を患ひ、口常に臭き故を以てするなり。之問終身慚憤す。

（孟棨『本事詩』怨憤）

「北門学士」は、乾封年間（六六六～六六八）に始まる武則天の寵臣集団で、宰相に匹敵する権限を与えられ権勢を振るっていた。『本事詩』では、この職を望んだ宋之問が「明河篇」を作り再三その思いを訴えたが、武則天は彼の口臭を嫌い竟に用いなかったという。この作品がいつどのような状況で作られたのかについては他に資料が残っておらず、「明河篇」は従来、この『本事詩』の記録を根拠に、宋之問が自らの不遇を武則天に訴え、仕官を求める意図で創作したものと考えられてきた。[5] 更には「爵禄や権勢を得ようとする態度が見える」などと評されることもあるが、これは先にも挙げた権力に固執する彼の伝記資料を考慮に入れたのであろう。[6] だが、そもそも宋之問の伝記や故事の真偽については、既に高木重俊氏が「宋之問に関する逸話には、虚構性、説話性の高いものが多い」と指摘するように、[7] 信憑性に乏しいものが少なくない。例えば先述の左遷先から無断で帰京したという『旧唐書』の記述については、陶敏、易淑瓊両氏によって、皇帝の恩赦を受けた正式な帰還であったと考証されている。[8] さらに謀叛を察知し密告した人物についても、『旧唐書』本伝では、宋之問が甥の之曇に密告させたとあるが、同書宋之遜伝では、察知したのも密告させたのも宋之問の兄の之遜となっており、また王同皎伝では、密告者が冉祖雍となるなど矛盾点が多く、真相は定かでない。さらに『本事詩』についても、詩話の前身と位置付けられるように、事実を基にしながらも小説的な要素が強く、その取り扱いには特に慎重を要することは周知の事実である。[9] にもかかわらず、「明河篇」の解釈が依然『本事詩』の説明を鵜呑みにし、作品の理解にまで深く影響している状況は、些か問題ではないだろうか。[10]

結論から先に述べると、宋之問の「明河篇」は権力を志向するものでも不遇を託つものでもない。この詩の目的は、武則天の娘太平公主の賛美にある。本論は「明河篇」と同時代の宮廷詩に着目し、これらの共通点から作品の創作年代や創作意図について再検討を試みるものである。

一　「明河篇」の全文と解釈

「明河篇」は七言二十四句からなる古体詩である。以下に全文を便宜上三段に分けて挙げる。[11]

1　八月涼風天氣清　　八月　涼風　天気清く、
2　萬里無雲河漢明　　万里　無雲　河漢明らかなり。
3　昏見南樓清且淺　　昏に南楼に見れて清く且つ浅く、
4　曉落西山縱復橫」　　暁に西山に落ちて縱復た横。
5　洛陽城闕天中起　　洛陽　城闕　天中に起ち、
6　長河夜夜千門裏　　長河　夜夜　千門の裏。
7　複道連甍共蔽虧　　複道　連甍　共に蔽虧し、
8　畫堂瓊戸特相宜　　画堂　瓊戸　特に相ひ宜し。
9　雲母帳前初泛濫　　雲母　帳前　初めて泛濫し、
10　水精簾外轉逶迤」　　水精　簾外　転た逶迤たり。

爽やかな夜風が吹く八月、高く澄んだ空に天の川が現れ、清らかなせせらぎのように流れて縱から横に夜空を移ろい、明け方西の方へ沈んでいく。第五句目以降は換韻し、視点は洛陽城に移る。第六句目の「長河」は洛水を指すだろう。洛水には天の川の渡し場を意味する「天津橋」が架かり、しばしば天の川に見立てられた。ここでは天の川と洛水を対比的に描き、天上から地上の洛陽城へと視点を自然に移動させることに効果的な役割を果たしている。

次の場面では、再び天の川の描写に戻りつつ、男女の別離を切なく叙情的に詠う。

11　倬彼昭回如練白　　倬たる彼の昭回練のごとく白く、

12　復出東城接南陌　　復た東城を出でて南陌に接す。
13　南陌征人去不歸　　南陌の征人 去りて帰らず、
14　誰家今夜擣寒衣　　誰が家か 今夜 寒衣を擣(う)つ。
15　鴛鴦機上疎螢度　　鴛鴦の機上 疎螢度(わた)り、
16　烏鵲橋邊一雁飛　　烏鵲の橋辺 一雁飛ぶ。
17　雁飛螢度愁難歇　　雁飛び 螢度りて 歇(やす)み難きを愁ひ、
18　坐見明河漸微沒　　坐ろに見る 明河の漸く微没するを。
19　已能舒卷任浮雲　　已に能く舒巻して浮雲に任せ、
20　不惜光輝讓流月　　光輝の流月に譲るを惜しまず。

第十一句目の「倬彼」「昭回」は天の川を指し、『詩経』大雅、雲漢に「倬たる彼の雲漢、昭らかに天に回る」とあるのを典故とする。白絹のような天の川が、城の東門から南門へ抜けるように滑らかな曲線を描いているのである。第十三句目以降は換韻して視点を地上に移し、戦地に赴くのであろうか、南門から出て行くひとりの男の姿が描かれる。砧を打つのはその妻であろう。帰らぬ夫に冬着を送るのである。第十五句目では、引き裂かれた夫婦を象徴するように蛍と雁が現れる。織機の傍を飛ぶ蛍は夫の帰りを待つ妻を、烏鵲橋の上空をゆく雁は戻れぬ夫を暗示しているだろう。「烏鵲橋」は、織女と牽牛の逢瀬のために烏鵲たちが翼を重ね合わせて作る橋である。だが蛍と雁は「明河」を渡り切ることができず、互いに会えぬまま天の川は沈んでゆく。

さて、次の最後四句は『本事詩』が取り上げる箇所である。

21　明河可望不可親　　明河は望むべくも親しむべからず、
22　願得乘槎一問津　　願はくは槎に乗りて一たび津を問ふを得ん。
23　更將織女支機石　　更に織女の支機石を将て、

24　還訪成都賣卜人」　還りて成都の売卜の人に訪はん。

第二十二句目の「乗槎」は、『博物志』に見える故事を踏まえる。

舊説云、天河與海通。近世有人居海渚者、年年八月有浮槎去來、不失期。人有奇志、立飛閣於査上、多齎糧、乘槎而去。十餘日猶觀星月日辰、自後芒芒忽忽亦不覺晝夜。去十餘日、奄至一處。有城郭狀、屋舍甚嚴。遙望宮多織婦、見一丈夫牽牛渚次飲之。牽牛人乃驚問曰、「何由至此。」此人具説來意、并問此是何處、答曰、「君還至蜀郡訪嚴君平則知之。」竟不上岸、因還如期。後至蜀、問君平。曰、「某年月日有客星犯牽牛宿。」計年月正是此人到天河時也。

旧説に云ふ、天河は海と通ずと。近世 人の海渚に居る者有り、年年八月浮槎の去来する有り、甚だ大にして、期を失はず。人に奇志有り、飛閣を査上に立て、多く糧を齎し、槎に乗りて去く。十余日猶ほ星月日辰を観るがごとく、自後芒芒忽忽として亦た昼夜を覚えず。去くこと十餘日、奄ち一処に至る。城郭の状有り、屋舍甚だ厳かなり。遙かに宮中を望めば多く織婦あり、一丈夫の牛を牽きて渚次に之に飲ましむを見る。牽牛人乃ち驚きて問ひて曰はく、「何に由りて此に至れるか」と。此の人具さに来意を説き、并せて此是は何処かと問ふ、答へて曰はく、「君還りて蜀郡に至り厳君平を訪ぬれば則ち之を知らん」と。竟に岸に上がらず、因りて還るに期するが如し。後に蜀に至り、君平に問ひて曰はく、「某年月日客星の牽牛宿を犯す有り」と。年月を計れば正に是れ此の人の天河に到るの時なり。

（張華『博物志』巻十）

一年に一度、八月になると現れる不思議な筏に乗って天に昇った男の話である。辿り着いた先で男は「織婦」と「牽牛」に出会い、ここは何処かと尋ねると「蜀の厳君平に聞け」との返事であった。「厳君平」は『漢書』に記される賢者で、「成都の市に筮を卜し」、日銭を得ると店を閉じて弟子たちに『老子』を教授した。揚雄の青年時代の師である。[12]『博物志』では、男の漂着先が天界であることを見抜いた人物として登場しており、「明河篇」の「売卜

人」はこの厳君平を指す。また『太平御覧』に引く『荊楚歳時記』では、この時織女が「支機石」という織機の礎石を男に与えている。[13] 他にも前漢の張騫が武帝の命で筏で天界に行った話など、[14] 織女に纏わる故事は当時様々なバリエーションが流布していた。

また第二十二句目「問津」は、『論語』微子篇や陶淵明「桃花源記」にあるように、川の渡し場を探す動作である。[15]「明河は遠くから眺めるだけで、近づくことはできない。天に昇るという槎に乗って渡し場を探し当てることができたら、織女の支機石を携えて厳君平を訪ねよう」と述べる。この最後の四句、特に第二十一句目の「明河は望むべくも親しむべからず」は、従来、「明河」を宮廷や武則天に見立て、そこに近付けない我が身の不遇を嘆くと解釈されてきた。[16] だが、「明河」が宮中や武則天を指すのであれば、直前の第十八句目において「明河の漸く微没す」と詠むのは極めて不敬であろう。場合によっては武則天の怒りを買いかねず、宋之問が敢えてそのような表現を用いるとは到底思えないのである。

二　織女伝説と太平公主

実は「明河篇」の最後四句は、宋之問独自の表現というわけではない。同時代の詩人たちの詩を見てみると、むしろ定番ともいえる典故表現であった。次に、太平公主の邸宅における応制詩を見てみよう。[17]

傳聞銀漢支機石　復見金輿出紫微　伝え聞く 銀漢 支機の石、復た見る 金輿の紫微より出づるを。
織女橋邊烏鵲起　仙人樓上鳳皇飛　織女 橋辺 烏鵲起ち、仙人 楼上 鳳皇飛ぶ。
流風入座飄歌扇　瀑水侵階濺舞衣　流風 座に入りて歌扇を飄し、瀑水 階を侵して舞衣に濺ぐ。
今日還同犯牛斗　**乘槎共逐海潮歸**　今日 還た牛斗を犯せしに同じ、槎に乗りて共に海潮を逐ひて帰らん。

（『全唐詩』巻百十五、李邕「奉和初春幸太平公主南荘応制」）

沁園佳麗奪蓬瀛　翠壁紅泉繞上京　沁園佳麗にして蓬瀛を奪し、翠壁紅泉 上京を繞る。

二聖忽從鸞殿幸　雙仙正下鳳樓迎
花含歩輦空間出　樹雜幃宮畫裏行
無路乗槎窺漢渚　徒知訪卜就君平

二聖忽として鸞殿より幸し、双仙 正に鳳楼に下りて迎ふ。
花は歩輦を含みて空間に出で、樹は幃宮を雑りて裏行を画く。
路無くして槎に乗りて漢渚を窺ひ、徒だ知るトを訪ねて君平に就くを。

（『全唐詩』巻六十九、邵昇「奉和初春幸太平公主南荘応制」）

主第山門起灞川　宸遊風景入初年
鳳皇樓下交天仗　**烏鵲橋頭敞御筵**
往往花間逢綵石　時時竹裏見紅泉
今朝扈蹕平陽館　**不羨乗槎雲漢邊**

主第の山門は灞川より起こり、宸遊の風景 初年に入る。
鳳皇楼下 天仗を交へ、烏鵲橋頭 御筵を敞く。
往往花間 綵石に逢ひ、時時竹裏 紅泉を見る。
今朝 平陽館に扈蹕す、槎もて雲漢の邊に乗ずるを羨まず。

（『全唐詩』巻七十三、蘇頲「奉和初春幸太平公主南荘応制」）

詩題にある「南荘」は、太平公主の長安の荘園の一つで、楽遊原という見晴らしの良い高台にあった。注目したいのは、三首が共通して「支機石」「織女」「烏鵲橋」「乗槎」「（厳）君平」といった織女伝説に纏わる語を用い、公主の邸宅を天上世界に例えている点である。また李邕詩では「仙人」、邵昇詩では「蓬瀛」や『漢武洞冥記』に現れる「紅泉」の語が見え、これらの詩は公主の邸宅を天界や仙界に擬えていることがわかる。蘇頲詩に「綵石」とあるのは、『穆天子伝』において穆王が綵石山で得たとされる玉石を指し、やはり神仙世界を想起させる語句を用いて公主の邸宅を幻想的に描いている。また「乗槎」は、本来は筏に乗って天上に昇ることを指すが、ここではその故事を踏まえた上で、仙境にも匹敵する素晴らしい邸宅に招かれたことを言う。公主の美しい邸宅にお供できたので、天に昇ることなど少しも羨ましくないと述べて、宴席に招かれた喜びを表現しているのである。

この宴席では他にも多くの詩人たちが応制詩を残しており、中には宋之問の名も見える。

青門路接鳳凰臺　素滻宸遊龍騎來
澗草自迎香輦合　巖花應待御筵開

青門 路は鳳凰台に接し、素滻 宸遊 竜騎来たる。
澗草 自ら迎へ香輦合ひ、巖花 応待して御筵開く。

宋之問「明河篇」と初唐の公主たち

文移北斗成天象　酒遞南山作壽杯　　文は北斗を移して天象を成し、酒は南山を遞りて寿杯を作す。
此日侍臣將石去　共歡明主賜金回　　此の日の侍臣　石を将ち去き、共に明主の金を賜りて回るを歓ぶ。
（宋之問「奉和春初幸太平公主南荘応制」）

「此の日の侍臣石を将ち去く」とあるが、「石」とは「支機石」を指すだろう。公主宅の宴に列座したことを、やはり天界に行った故事に擬えているのである。宴席ではしばしば宮廷詩人たちが詩作を競い、出来栄えの優劣によって褒美の品が与えられた。「共に明主の金を賜りて回るを歓ぶ」とは、中宗から褒美が振る舞われたことを指している。他にも初唐の公主の邸宅において織女伝説に纏わる故事を用いる例は、例えば韋元旦「夜宴安楽公主山荘応制」に「主第新成銀作榜、賓筵廣宴玉爲樓。壺觴既卜仙人夜、歌舞宜停織女秋（主第新成 銀もて榜を作し、賓筵広宴玉もて楼を為す。壺觴既にトす仙人の夜、歌舞宜しく停むべし織女の秋）」とあり、また沈佺期「同李舍人冬日集安楽公主山池」に「常聞天女貴、家即帝宮連。亭挿宜春果、山衝太液池。橋低烏鵲夜、臺起鳳凰年（常に聞く天女の貴きを、家は即ち帝宮に連なる。亭 宜春の果を挿え、山 太液池に衝かふ。橋低くす 烏鵲の夜、台起つ 鳳凰の年。）」など散見される。

ところで、公主の邸宅を天上世界に比すのは、天帝の娘である織女を天子の娘である公主に重ねたためと思われる。[18] 初唐の宮廷詩を見ると、公主を織女に比した例も多く、例えば宋之問は「太平公主山池賦」の中で「粤若公主誕生、皇家太平。徵郡國以選號、叶時雍之美名。孕靈娥之秀彩、輝婺女之淳精（粤若に公主誕生し、皇家太平なり。郡国を徴して以て選号し、時雍を叶ふるの美名なり。霊娥の秀彩を孕み、婺女の淳精を輝かす）』と、太平公主を「霊娥」や「婺女」に喩える。他にも、金城公主が吐蕃に降嫁する際の李嶠の応制詩「奉和送金城公主適西蕃応制」に「還将弄機女、遠嫁織皮人（還た弄機女を将て、遠く織皮人に嫁す）」とあり、また淮陽公主の崩御に際し李乂が「淮陽公主挽歌」の中で「玉顔生漢渚、湯浴栄天女（玉顔 漢渚に生じ、湯浴 天女を栄えしむ）」と詠むなど、公主自身を織女に擬えることも盛んに行われていた。

さて、ここで改めて「明河篇」の本文を見ると、やはり織女伝説を用いて詠んだものであり、上述の「太平公主

南荘応制」詩と詩句や表現上の共通点が極めて多い。ところが、後者が公主の邸宅における華やかな宴の情景を詠むのに対し、「明河篇」は、自らの待遇に対して不満を託つ作品と捉えられている。なぜ両者の解釈はこれほどまでに異なるのであろうか。既に見てきたとおり、「明河篇」は全篇を通して天の川の美しさや、男女の愛を切なくロマンチックに描いた作品であり、少なくとも本文からは決して宋之問の負の感情を読み取ることはできない。逆に言えば、「明河篇」を宋之問の不満を訴えた作品と解釈する根拠は、『本事詩』の記述以外に無いのである。「明河篇」は、本当に従来言われているように、宋之問の失意を詠う作品なのだろうか。

三　沈佺期「鳳簫曲」と「明河篇」

「明河篇」がいつ、どのような状況で創作されたのかを考える上で、非常に興味深い作品がある。沈佺期の「鳳簫曲」である。[19]

八月涼風動高閣　千金麗人捲綃幕
已憐池上歇芳菲　不念君恩坐搖落
世上榮華如轉蓬　朝隨阡陌暮雲中
飛燕侍寢昭陽殿　班姫飲恨長信宮
長信宮　昭陽殿
春來歌舞妾自知　秋至簾櫳君不見
昔時嬴女厭世紛　學吹鳳簫乘彩雲
含情轉睞向蕭史　千載紅顔持贈君

八月涼風　高閣を動かし、千金　麗人　綃幕を捲く。
已に憐れむ　池上に芳菲を歇するを、念はず　君恩の坐ろに搖落するを。
世上　栄華は転蓬のごとく、朝に阡陌に隨ひ暮には雲の中。
飛燕は昭陽殿に侍寝し、班姫は長信宮に飲恨す。
長信宮、昭陽殿。
春来たりて歌舞するも妾自ら知る、秋　簾櫳に至らば君の見えざるを。
昔時　嬴女　世紛を厭ひ、鳳簫を吹くを学びて彩雲に乗る。
情を含み転睞して蕭史に向かひ、千載　紅顔もて君に持贈す。

冒頭「八月涼風」は、「明河篇」と全く同じ詠い出しである。第三句目以降は、移ろい易い君主の寵愛と宮女の悲

しみを詠んでおり、「飛燕」「班姫」は共に前漢の成帝の寵姫、趙飛燕と班婕妤である。ここでは「昭陽殿」に迎えられ栄華を極める趙飛燕と、失寵し「長信宮」に追いやられた班婕妤が対比される。第十三句目の「嬴女」は、秦の穆公（嬴姓）の娘弄玉のことで、簫史に嫁ぎ共に登仙した伝説上の人物である。移り変わりの激しい世において、ひとり弄玉だけが永遠の美を祝福されるのである。

一見すると、織女伝説をモチーフとする「明河篇」とは全く異なる作品である。だが、そもそも「織女」が公主を暗喩するのは、既に述べたように天帝の娘と皇帝の娘という共通点のためである。そして「嬴女」もまた穆公の娘である。実は初唐の宮廷詩人の間では、「織女」だけでなく「嬴女」もまた公主の象徴として盛んに用いられた。

淮南有小山　**嬴女隱其間**
折桂芙蓉浦　吹簫明月灣
扇掩將鷄曲　釵承墮馬鬟
歡情本無限　莫掩洛陽關

淮南に小山有り、嬴女 其の間に隠る。
桂を折る 芙蓉の浦、簫を吹く 明月の湾。
扇 将鷄曲を掩ひ、釵 墮馬鬟を承く。
歡情 本より限り無く、洛陽の関を掩ふ莫かれ。

（『全唐詩』巻八十、張昌宗「太平公主山亭侍宴」）

星橋他日創　**仙榜此時開**
馬向鋪錢埒　簫聞弄玉臺
人同衛叔美　客似長卿才
借問遊天漢　誰能取石回

星橋 他日創（はじ）まり、仙榜 此の時開く。
馬 鋪錢埒に向かひ、簫 弄玉の台に聞こゆ。
人 衛叔の美に同じく、客 長卿の才のごとし。
借問す 天漢に遊び、誰か能く石を取りて回るかと。

（『全唐詩』巻四十六、宗楚客「安楽公主移入新宅侍宴応制」）

紫禁乘宵動　青門訪水嬉
貴台鱣序集　**仙女鳳樓期**
合宴簪紳滿　承恩雨露滋
北辰還捧日　東館幸逢時

紫禁 宵に乗じて動き、青門 水を訪ひて嬉（たはむ）る。
貴台 鱣序の集ひ、仙女 鳳楼の期。
合宴 簪紳満ち、承恩 雨露滋す。
北辰 還りて日を捧げ、東館 幸ひに時に逢ふ。

（『全唐詩』巻九十二、李乂「侍宴長寧公主東荘応制」）

李乂詩に見える「仙女」も弄玉（嬴女）のことで、「鳳楼」は彼女が住んだ楼閣の名である。このように「弄玉」「嬴女」もまた初唐の宮廷詩人たちの間では、公主に対する応制詩の中でしばしば用いられた。つまり、沈佺期の「鳳簫曲」と宋之問の「明河篇」は、冒頭の四文字が一致しているだけでなく、両作品共に公主を賛美するという重大な共通点を持っているのである。沈佺期と宋之問は、ほぼ同時に珠英学士に選ばれ、宮廷詩人として名を挙げ、「沈宋」と呼ばれて持て囃された。二人で詩会の一位の座を争うこともあった。

中宗正月晦日、幸昆明池賦詩、羣臣應制百餘篇。帳殿前結綵樓、命昭容選一首、爲新翻御製曲。從臣悉集其下。須臾紙落如飛、各認其名而懐之。既進、唯沈宋二詩不下、又移時、一紙飛墜、競取而觀乃沈詩也。及聞其評曰、「二詩工力悉敵、沈詩落句云、『微臣彫朽質、羞覩豫章材』、蓋詞氣已竭、宋詩云、『不愁明月盡、自有夜珠來』、猶陟健擧。」沈乃伏、不敢復爭。

中宗の正月晦日、昆明池に幸して詩を賦し、群臣の応制百余篇あり。殿前に帳して綵楼を結び、昭容に命じて一首を選び、新翻の御製曲を為らしむ。従臣悉く其の下に集ひ、須臾にして紙の落つること飛ぶがごとし。各おの其の名を認め之を懐く。既に進み、唯だ沈宋の二詩のみ下らず。又時を移して一紙飛び墜つ、競ひて取りて観るに沈の詩なり。其の評を聞くに及びて曰く、「二詩の工力悉く敵ふも、沈の詩落句に『微臣彫朽質、羞覩豫章材』と云ふは、蓋し詞気已に竭きたり、宋の詩に『不愁明月盡、自有夜珠来』と云ふは、猶ほ健挙に陟（のぼ）るなり」と。沈乃ち伏し、敢へて復た争はず。

（『唐詩紀事』巻三、上官昭容）

宮廷詩人として共に武則天や中宗に扈従し、共に詩を競い合ってきた二人が、冒頭の歌い出しが全く同じ作品を作った。さらに共に「嬴女」「織女」という公主を連想させる語を用いている。この二つの作品は、公主に対して、しかも同時に作られたのではないだろうか。宋之問が「洛陽」と「織女」を、沈佺期が「長安」と「嬴女」を詠い、

そのテーマ性に均整がとれすぎているのも、競作だったとすれば説明がつく。また「八月涼風」とあるのは、或いは中秋の名月である八月十五日に合わせた宴席で披露されたものかもしれない。「明河篇」の第二十句目で、天の川の輝きが月の光に負ける、と詠むのも、満月の夜であれば当然である。

では、二人が詩を献上した公主は一体誰なのか。沈佺期の「鳳簫曲」は、『珠英学士集』に収録される。この書は、『三教珠英』編纂のために招集された所謂珠英学士たちの詩文を集めたもので、編纂者は『三教珠英』の実質的な責任者でもあった崔融である。『珠英集』は現在は散逸したが、敦煌遺書に四巻と五巻の一部が残存しており、計十三人、五十五首の詩歌が見える。これらの収録作品を調べると、六九〇年から七〇一年頃までの作品が確認できることから、大足元年（七〇一年）に完成した『三教珠英』とほぼ同時期に編纂されたと考えられている。[20] 初唐の公主の中でこの頃絶大な権力を握っていたのは、武則天の娘太平公主である。[21] 彼女に対する武則天の信頼は厚く、政治的にも経済的にも破格の待遇を受けていた。

公主方額廣頤、多權略、太后以爲類己、寵愛特厚、常與密議天下事。舊制、食邑、諸王不過千戸、公主不過三百五十戸。太平食邑獨累加至三千戸。

公主は方額廣頤にして、権略を多くし、太后以て己に類（に）ると為し、寵愛すること特だ厚く、常に与に天下の事を密議す。旧制、食邑、諸王は千戸を過ぎず、公主は三百五十戸を過ぎず。太平の食邑 独り累加され三千戸に至る。

武則天は太平公主を「類己」として特に寵愛し、密議には必ず傍に置いて参謀とした。そんな公主に取り入り栄達を目論む者も多く、連日多くの男達が公主の門前に列を成した。彼らは「斜封官」と呼ばれ、その数は千を数えたと言われる。[22] また太平公主は、その圧倒的な経済力を背景に次々と豪奢な邸宅を造築した。『唐両京城坊考』[23]に拠れば、公主の邸宅は宮中の内宅のほか、別業として洛陽の正平坊、積善坊、積徳坊の三カ所を所有しており、また武則天が長安に行幸した際には新たに楽遊原の南荘を築き、さらに中宗が都を長安に移してからは、興道坊、平興

坊、興寧坊、醴泉坊の四カ所に居を構えたという。無論、この他郊外の行楽地にも複数の荘園を所有していただろう。このうち「明河篇」がどの邸宅で詠まれたものかはわからないが、公主の暮らしぶりを伝える資料として、『旧唐書』の太平公主伝よりその一端を垣間見ることができる。

公主由是滋驕、田園遍近甸膏腴、而市易造作器物、吳、蜀、嶺南供送、相屬於路。綺疏寶帳、音樂輿乘、同於宮掖。侍兒披羅綺、常數百人、蒼頭監嫗、必盈千數。

公主 是に由りて滋よ驕り、田園は近甸膏腴に遍くし、造作の器物と、吳蜀嶺南の供送を市易するに、路に相属す。綺疏宝帳、音楽輿乗、宮掖に同じくす。侍兒の羅綺を披るもの、常に数百人、蒼頭監嫗、必ず千数を盈たす。

（『旧唐書』巻一八三、太平公主伝）

権力を盾に広大な土地を占有し、遠方の珍品を取り寄せ、邸宅の内装や設備はまるで宮中のようであったという。今を時めく太平公主の宴席に招かれ、豪華絢爛な邸の風景を鑑賞しつつ、宋之問が公主に献上した作品こそ、「明河篇」だったのである。作中「明河は望むべくも親しむべからず、願はくは槎に乗りて一たび津を問ふを得ん。更に織女の支機石を将て、還って成都の売卜の人に訪はん」と述べるのは、遠くから眺める天の川を羨んだものではない。天上世界に匹敵する美しい邸宅を讃え、その主である太平公主の栄華を讃えることこそ、宋之問の真意ではないだろうか。「明河篇」は、宮廷詩人として地位を得、太平公主の宴席に参列するほどの名声を築いた宋之問の、充実した宮廷生活の一齣を詠んだ作品だったのである。

四 「乗槎」と「支機石」

さて、以上の推測を妥当とするならば、「乗槎」や「支機石」等の語は、一体どのように捉え直すべきであろう。論者はこれらは公主の宴席の実景と考えている。初唐の宮廷詩人が公主の邸宅を仙境に擬らえていたことは既に述

べた。しかしこれは決して単なる誇張や比喩表現ではなく、実際に神仙世界をモデルに設計、造園されていたようなのである。次に挙げるのは、長安の金城坊にあった安楽公主の「定昆池」に関する記述である。

安樂公主尤驕横、宰相以下多出其門。與長寧公主競起第舍、以侈麗相高、擬於宮掖、而精巧過之。安樂公主請昆明池、上以百姓蒲魚所資、不許。公主不悦。乃更奪民田作定昆池、延袤數里、**累石象華山、引水象天津**、欲以勝昆明、故名定昆。

安楽公主尤も驕横にして、宰相以下多く其の門より出づ。長寧公主と競ひて第舍を起て、以て侈麗相高く、宮掖に擬して、精巧なること之に過ぐ。安楽公主 昆明池を請ふに、上は百姓蒲魚の資する所を以て、許さず。公主悦ばず。乃ち更に民田を奪ひて定昆池を作る、延袤数里、石を累ねて華山に象り、水を引きて天津に象る、以て昆明に勝らんと欲し、故に「定昆」と名づく。（『資治通鑑』巻二百九、唐紀二十五）

安楽公主は、禁苑の昆明池の代わりとして民間の土地を取り上げて開鑿し、「定昆池」と名付けた。数キロに及ぶ広大な池で、周囲に石を積み上げ「華山」に見立て、河を引いて「天津」に模し、地上に神仙世界を再現したのである。ここで、公主が天の川の渡し場である「天津」をイメージして造池していたことは注目に値する。また終南山の麓にあった長寧公主の別業は、人工の山を築き水を引いて池を造り、傍に三層の高殿が聳える豪華なものだった。[24] 次の詩はこの長寧公主邸に中宗が行幸した際、上官昭容に作らせた応制詩である。

沁水田園先自多　齊城樓觀更無過
倩語張騫莫辛苦　人今從此識天河

沁水 田園 先ず自ら多く、斉城 楼観 更に過ぐる無し
倩語 張騫 辛苦する莫かれ、人 今 此に従りて天河を識る

（『全唐詩』巻五、上官昭容「遊長寧公主流杯池二十五首」其二十三）

「人 今此に従りて天河を識る」（流杯池によって天河のさまを知る）と詠んで、ここでも池自体を天の川に見立て

ている。「明河篇」も、天の川に纏わる故事を多用しているが、太平公主の別荘にも実際に天の川に擬して造成した池があった可能性は高い。また前掲の『資治通鑑』に、安楽公主の邸宅には華山に見立てた石山があったとあるが、中国の園林は池の周囲を叠石や石像、石室といった石造物で囲むように配置するのが一般的である。長寧公主の庭園も、高価な古木や奇岩を大量に用いて造園された。玄宗のクーデターによって公主が都を追われると、彼女の邸宅は売却されたが、庭の「木石」だけで二十億万の値が付いたという。[25]「支機石」とは、このような庭園の石造物を指すのではないだろうか。宋之問「奉和晦日幸昆明池応制」には、

春豫靈池會　滄波帳殿開　春予 霊池の会、滄波 帳殿開く。
舟淩石鯨度　槎拂斗牛回　舟は石鯨を凌ぎて度り、槎は斗牛を払ひて回る。
節晦蓂全落　春遲柳暗催　節は晦にして蓂全く落ち、春遅くして柳暗かに催す。
象溟看浴景　燒劫辨沈灰　象溟 浴景を看、燒劫 沈灰を弁ず。
鎬飲周文樂　汾歌漢武才　鎬飲 周文の楽、汾歌 漢武の才。
不愁明月盡　自有夜珠來　明月の尽くるを愁へず、自ずから夜珠の来たる有り。

と、舟に乗って昆明池を遊覧し、池の周囲に設置された「石鯨」や「斗牛」石の像を詠む。「明河篇」に「支機石」や「乗槎」の語が見えるのは、単に邸宅の風景を賛美しただけではなく、実際に仙界と見紛うような珍しい石造物が公主の池の周囲に配置されており、宋之問らはその池上で舟に乗り詩宴に興じていたのではないか。或いは池のほとりで楼船を鑑賞しつつ詠んだものかもしれない。李嶠「同賦山居七夕」(『全唐詩』巻五十八)に、

明月青山夜　高天白露秋　明月 青山の夜、高天 白露の秋。
花庭開粉席　雲岫敞針樓　花庭に粉席開き、雲岫に針楼敞(ひら)く。
石類支機影　池似泛槎流　石は支機の影に類(に)たり、池は泛槎の流るるがごとし。

暫驚河女鵲　終狎野人鷗　　暫く河女の鵲に驚き、終に野人の鴎に狎る。

と、庭園の「石」を「支機」に擬え、池を「泛槎」が流れるようだと詠うのも、この証左となるものであろう。

注

（1）『唐才子伝』巻一劉希夷伝「嘗吟詩曰、『年年歳歳花相似、歳歳年年人不同』。宋之問苦愛此一聯、知其未傳於人、懇求之許而竟不與。之問怒其誑巳使以土囊壓殺於別舍。時未及三十、人悉憐之」。

（2）『新唐書』巻二〇二本伝「于時張易之等烝昵寵甚、之問與閻朝隱、沈佺期、劉允濟傾心媚附、易之所賦諸篇、盡之問、朝隱所爲、至爲易之奉溺器」。

（3）『旧唐書』巻一九〇本伝「及易之等敗、左遷瀧州參軍。未幾、逃還、匿於洛陽人張仲之家。仲之與駙馬都尉王同皎等謀殺武三思、之問令兄子發其事以自贖。及同皎等獲罪、起之問為鴻臚主簿、由是深爲義士所譏」。

（4）目加田誠「初唐宮廷詩人の群」（『日本中国学会報』第二集、一九五〇年）

（5）劉慶華「神龍初文人之貶与初唐詩風」（『人文雑誌』二〇一〇年第三期）、張崇利「『沈宋』詩歌芸術研究」（『蘭州教育学院学報』二〇一〇年第五期）等参照。

（6）楊墨秋「既歓懐禄情、復協滄洲趣――従宋之問的隠逸詩談其性格的両重性――（『古典文学知識』一九九四年第四期）に「北門學士是有相当大的権力的。之問求不到而耿耿于懷、便可見其何等的懷禄貪勢」とある。

（7）高木重俊『初唐文学論』（研文出版、二〇〇五年、四一六頁）。安東俊六氏も『新唐書』宋之問伝について「あからさまな軽蔑が見られる」と指摘する（『杜甫研究』風間書房、一九九六年、三八八頁）。

（8）陶敏、易淑瓊校注『宋之問沈佺期集校注』（中華書局、二〇〇六年）附録の「沈佺期宋之問簡譜」に拠ると、「初承恩旨言放帰舟」詩は左遷先の瀧州で恩赦を受け、都に戻る途上で作られたもので、両唐書の宋之問本伝に貶謫地から「逃還」したとあるのは事実ではないとしている。

（9）日向一雄『本事詩』の注釈と平安鎌倉文学における『本事詩』受容の研究」（『明治大学人文科学研究所紀要』六九号、二〇一一年）等参照。

（10）「明河篇」の解釈を『本事詩』の記事に依拠することに懐疑的なのは、管見の限りでは明治書院新釈漢文大系『古文真宝』所収の「明河篇」の通釈中に「武后の愛顧を求めるための寓意の用語であるかどうかはたしかでない。銀河を詠じて、それに関する伝説を詠みこんだだけと見てもさしつかえがない」とあるのみである。

（11）本論文に引用する宋之問詩は全て陶敏、易淑瓊『宋之問集校注』（中華書局、二〇〇六年）を底本とした。

（12）『漢書』王貢両龔鮑伝の序に「君平卜筮於成都市、以爲『卜筮者賤業、而可以惠衆人。有邪惡非正之問、則依蓍龜爲言利害。與人子言依於孝、與人弟言依於順、與人臣言依於忠、各因勢導之以善、從吾言者、已過半矣。』裁日閱數人、得百錢足自養、則閉肆下簾而授『老子』。博覽亡不通、依『老子』、嚴周之指著書十餘萬言。楊雄少時從遊學、以而仕京師顯名、數爲朝廷在位賢者稱君平德」とある。

（13）『太平御覧』巻八、天部、漢に引く『集林』に「昔有一人尋河源見婦人浣紗、以問之曰、『此天河也。』乃與」一石而歸。問嚴君平曰、『此織女支機石也。』」とある。

（14）『太平御覧』巻五十一、地部、石に引く『荊楚歳時記』に「張騫尋河源得一石、示東方朔。朔曰、『此石是天上織女支機石。何至於此。』」とある。

（15）『論語』微子篇に「長沮、桀溺耦而耕、孔子過之、使子路問津焉。長沮曰、『夫執輿者爲誰。』子路曰、『爲孔丘。』曰、『是魯孔丘與。』曰、『是也。』曰、『是知津矣。』」と。また陶淵明「桃花源記」に「太守即遣人隨其往、尋向所誌、遂迷不復得路。南陽劉子驥、高尚士也。聞之欣然規往。未果、尋病終。後遂無問津者」と。

（16）楊恂驊「初唐歌行的主題演変及其原因探析」（『鄂州大学学報』二〇一四年第二期）に「宋之問的『明河篇』把武后的宮廷比喩成天庭、寄寓了自己求官的迫切愿望」とあり、司海迪「奉宸府性質考論」（『三峽大学学報』二〇一三年第一期）に「唐代孟棨的『本事詩』怨憤記載宋之問曾作『明河篇』向武則天表明心迹。『明河可望不可亲、愿得乘槎一問津。』然宋之問『患口疾』、『口常臭』、武則天表示不能接受、不愿与之親近」とある。

（17）引用は『全唐詩』を底本とするが、適宜『文苑英華』、『唐詩紀事』等を参照した。

(18) 『荊楚歳時記』「天河之東有織女、天帝之子也」、また『述異記』「天河之東有美麗女人、乃天帝之子」等。

(19) 本論文に引用する沈佺期詩は全て陶敏、易淑瓊『沈佺期集校注』（中華書局、二〇〇六年）を底本とした。

(20) 傅璇琮、陳尚君、徐俊編『唐人選唐詩新編』（中華書局、二〇一四年、五七頁）及び陶敏、傅璇琮著『唐五代文学編年史』（遼海出版社、一九九八年、三八九頁）等参照。

(21) 初唐の有力な公主としてこのほか中宗の娘長寧公主と安楽公主がいるが、長らく盧陵に幽閉されていた中宗と共に都へ帰還を許されたのが聖暦二年（六九九）のことであり、姉妹が太平公主と勢力争いを開始するのは武則天の死後、中宗の復位以降である。

(22) 『資治通鑑』巻二〇九、唐紀二十五に「（太平）公主所欲、上無不聽、自宰相以下、進退繫其一言、其餘薦士驟歴清顯著不可勝數、權傾人主、趨附其門者如市」、また『新唐書』巻四十五、選挙志下「中宗時、韋后及太平、安樂公主等用事、於側門降墨敕斜封授官、號『斜封官』、凡數千員」とある。

(23) 徐松撰、李健超増訂『増訂唐両京城坊考』（三秦出版社、二〇〇六年）。

(24) 『新唐書』巻八十三、長寧公主伝に「造第東都、使楊務廉營總。第成、府財幾竭、乃擢務廉將作大匠。又取西京高士廉第、左金吾衛故營合爲宅、右屬都城、左頰大道、作三重樓以馮觀、築山浚池。帝及后數臨幸、置酒賦詩。又并坊西隙地廣鞠場」とある。

(25) 『新唐書』巻八十三、長寧公主伝に「東都第成、不及居、韋氏敗、斥愼交絳州別駕、主偕往、乃請以東都第爲景雲祠、而西京鬻第、評木石直、爲錢二十億萬」とある。

本研究はJSPS科研費（JP16K16809）の助成を受けたものです。This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP16K16809.